

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：37604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653095

研究課題名（和文） 中国農村における留守児童と教育格差に関する研究

研究課題名（英文） Research on the Left-behind Children in Chinese Agricultural Villages and Educational Discrimination

研究代表者 登坂 学 (TOSAKA MANABU)

九州保健福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：50308144

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国湖南省農村における参与観察および浙江省商業都市におけるフィールドワークを通じて、中国農民の生活・生産の場に関わりつつ、子どもや両親の実際状況を観察するなかから、とくに子どもたちの未来への夢に注目、その実現に大人の側が果たすべき役割とは何であるかを考察した。本研究をつうじて、限定的ではあるが、その教育に関わる人々の実際生活に即した問題解決への努力、いくなれば中国社会の良識ある人々の取り組みを掘り起こすことができた。

研究成果の概要（英文）：

This study examines the roles that adults should assume when helping underprivileged rural children to achieve their dreams for the future. Observations and fieldwork were conducted in an agricultural village in the Hunan Province and a commercial city in the Zhejiang Province, respectively. The primary focus was the overall conditions both in the spheres of life and work faced by children and their parents in rural farming communities. Although this study is limited in its overall scope, it revealed several efforts by active Chinese citizens involved in providing education and practical solutions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	0	600,000
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	180,000	1,980,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：農村、留守児童、外来建設者、沿海商工業都市、教育格差、夢の実現、社会的支援、フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

「先に豊かになることができるものから豊かになろう」（先富論）との号令のもと、市場経済を採用した中国経済は、実質 GDP 成長率が 10.4%（05年）→ 11.6%（06年）→ 11.9%（07年）と、二桁台を維持する発展を遂げている。折しも北京オリンピックは改革

開放政策の成功を国内外にアピールする絶好の機会として位置づけられていた。国を挙げての選手強化策が実を結んだメダル量産（金 51 枚＋銀 21 枚＋銅 28 枚＝計 100 枚）に加え、建築水準が高くゴージャスな競技施設の数々は、国内外に国威をアピールする絶好の機会となったのである。その実、華やか

なオリンピック舞台の建設を陰で支えていたのは農村部より出稼ぎに来ていた無名無数の出稼ぎの臨時工たちである。その存在や彼らの生活背景を想像できる者は果たしてどれだけいるのだろうか。

都市住民との収入格差が広がっている。2007年は過去30年間でその差が最大になった。07年の農民1人あたりの純収入は前年比9.5%増加し、85年以来最大となったものの、収入比は3.33対1、金額の差は9,649元(154,336円:1元=16円で計算)となったのである。その結果、農村の余剰労働力(真に余剰であるかは別にして)は都市の労働市場に組み込まれていった。2007年、農村部を出た農民は1億2600万人で、郷鎮企業で就業した農民は1億5000万人、重複部分を控除して合計2億2600万人に達した。

その結果、中国の農村から青壮年層が姿を消している。出稼ぎは農村経済の活性化に寄与することとなったが、その一方で農村に残された子どもたちに「父母の不在」という教育上の問題を残した。出稼ぎのため父母が不在の子どもたちを「留守児童」と称する。農村の余剰労働力は1.5億~1.7億人で、大規模な労働力移動が依然存在している。国家人口発展研究戦略課題チームによる国家人口発展戦略研究報告は、人口都市化水準の年平均成長を1ポイントとして計算した場合、今後20年に3億の農村人口が都市人口に転化する見込みである。つまり「留守児童」の数も将来的に拡大する可能性がある。

中国において「留守児童」の問題は「和谐社会」(調和ある社会)を目指す胡錦濤-温家宝政権にも深刻に受け止められ、様々な取り組みがなされている。しかしながら日本国内においては、報道ベースでは散見されるものの、以前より中国農村教育に関心を持つ少数の研究者を除き、未だその実態は把握されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国政府や各レベルの地方政府及び教育現場が、「子どもの最善の権利」確保のためどのように取り組んでいるかを、現地におけるフィールドワーク及び資料収集により明らかにすることである。

3. 研究の方法

その手順として、(1)直近のデータを基に留守児童の現状を把握、(2)政府指導部の法令・通達文書に基づき留守児童をめぐる諸対応を検証、(3)現場の教師や現地地方政府の取り組みに関する事例研究である。(2)を検証する必要があるのは、このような大きな社会問題の解決には政府による公費投入が欠かせないからであり、政府指導部がその社会問題を十分認識している前提が必要だから

である。しかし何よりも、教育現場の教師や管理者が留守児童の問題にしっかり向き合い、努力を続けなければ解決は困難である。そこで(3)において実地調査を行い、政府の指示が末端では如何に展開され、効果を生んでいるか検証する。

4. 研究成果

本研究の最大の成果は、浙江省義烏市におけるフィールドワークで実施した、子どもを持つ出稼ぎ労働者に対するアンケート及び聞き取り調査である。

労働者自身のバックグラウンドや、子女の教育に関しどのような考えを持っているのか等を把握するため、あらかじめ質問項目を整理し質問表の形式に整えた。なお、労働者のほとんどがこのような調査に慣れていないことを考慮に入れ、回答に時間のかかる詳細なものは避けて質問項目を必要最小限に限定した。

計画段階においては、まず現地協力者(義烏在住の大学生Gさん)にクリスマス用品工場(Fさんの勤める工場を含め)をはじめとする日用雑貨を製造する工場を数カ所ピックアップしてもらい、その経営者及び労働者に趣旨を説明したうえで、留守児童を持つ親に限定して総計100名を抽出し、面接形式で実施する予定であった。ところが前述のような労働者をめぐる国内情勢の変化に加え、生産が書き入れ時を迎えたことも影響し、経営者の協力を得ることが困難となった。

そこで現地協力者から代替案として提起されたのが、人材市場に赴き労働者へ直接聞き取りを実施する方法であった。義烏市には正式な人材市場として中国義烏人材市場(香山路389号)があるが、それ以外にも非公式な市場(労働者の集まる「寄せ場」。工場から手配師がやってきて直接労働者を車に乗せて工場に送り込む)が数カ所存在する。これら人材市場の門前に集まっている求職者に対してアンケート及びインタビューを試みるのである。現場における無用なトラブルを避けるため、現地協力者の肉親(地元の有力者及び警察官)にそれとなく打診、このインタビュー内容なら大丈夫であろうとの感触を得た。

連日38~39度にも達する猛暑の中、日中野外で長時間活動するのは危険であるため、午前中の比較的短時間(10時~12時)集中的に実施した。まず声をかけて挨拶し、次いで身分を明かし調査の趣旨や目的を説明、子どもの有無を確認し、インタビューに移っていった。仕事を待っている出稼ぎ労働者たちは大学人の聞き取り調査に概ね好意的かつ協力的であったが、中には警戒する人や、逆にインタビューに人垣ができたり、横からからかわれたり、代わりに答えてしまったり

(決して悪気があるわけではない)と、若干の困難にも遭遇した。しかし義烏滞在中に計53人に聞き取りを実施することができたのである。次の項では、まずその質問項目を提示したうえで得られたデータを提示し、その傾向を総括したい。

聞き取り調査の結果

まず調査の基となった質問票の内容とその結果を開示する。なお紙幅の関係で日本語版(アンケート原稿)のみ掲示し、結果については重要な数値を提示したうえで若干の解釈を加えるのみとし、詳細な数値の提示・図表化及びその分析は稿を改めて行うこととする。

質問票

【資料2】

外来建設者に対するアンケート
このアンケートの結果は私(登坂学)が自己の研究論文作成及びその発表のためにのみ使用するものであり、ここで知り得た情報は、上記の目的以外に使用しないことを誓約いたします。

- Q1. あなたの性別・年齢は?
男 女 () 歳
- Q2. あなたの出身省・市・県は?
() 省 () 市
() 県
- Q3. あなたの家族は何人ですか?
() 人
- Q4. あなたの家族構成は?
() () ()
() ()
- Q5. あなたの学歴は?
() 卒業・中退
- Q6. あなたの月収は?
() 元
- Q7. あなたのひと月当たりの実家への仕送り額は?
() 元
- Q8. 子どもの数・性別・年齢・在学状況は?
性別 年齢 在学状況(何年生?)
- Q9. 子どもを義烏に連れて来ていますか?
はい いいえ
(連れてきている場合)
- Q10-1. 子どもの学校の成績についてどう認識していますか?
とても良い どちらかといえば良い
普通 どちらかといえば悪い 悪い
- Q10-2. 子どもの学校における人間関係はどうですか?
とても良い どちらかといえば良い
普通 どちらかといえば悪い とても悪い

Q10-3. 学校の先生の対応には満足できますか?

とても満足 どちらかと言えば満足
普通 どちらかと言えば不満 不満
(連れてきていない場合)

Q10-1. どれくらいの間隔で帰省しますか?

() か月に1回 または
() 年に1回

Q10-2. 主に誰が面倒を見ていますか?(複数回答可)

() ()

Q10-3. 子どもの情緒は安定していますか?

(どれかに✓を)

とても安定 どちらかと言えば安定
普通

どちらかと言えば不安定 不安定

Q10-4. 子どもの学校の成績についてどう認識していますか?

(どれかに✓を)

とても良い どちらかと言えば良い
普通

どちらかと言えば悪い 悪い

Q10-5. 子どもは学校における人間関係はどうですか?(どれかに✓を)

とても良い どちらかと言えば良い
普通

どちらかといえば悪い とても悪い

Q10-6. 学校は留守児童に対して特別の支援を行っていますか?

(どれかに✓を)

行っている 行っていない 分からない

Q10-7. 先生は留守児童に対して特別の配慮をしていますか?(どれかに✓を)

している していない 分からない

Q10-8. 地元政府は留守児童に対する支援を行っていますか?

している していない 分からない

Q11. 子どもにはどのくらいの学歴を望みますか?

初中卒業 高中卒業 大学卒業
碩士卒業 博士卒業

Q12. 子どもの教育でいま悩んでいることはありますか?また、子どもに希望することはありますか?(自由口述)

Q13. あなたは何を作っていますか?

(あなたはどのようなサービスに従事していますか?)

また、この商品を使う人に、なにかコメントをお願いします。(このサービスを受ける消費者になにかコメントをお願いします)(自由口述)

ご協力ありがとうございました!

Q1については、アンケート及びインタビューに応じてくれたのは計53人(男29人、女24

人)であり、平均年例は34.1歳であった。子どもを抱えた比較的若い層が出稼ぎに來ていることが分かる。

Q2については、江西省19人、河南省11人、貴州省6人、四川省5人、安徽省3人、浙江省2人、湖南省2人、重慶市(元四川省の都市で現在は中央直轄市)2人、湖北省1人、雲南省1人、江蘇省1人であった。地理的に近く、内陸部にある江西・河南の両省が最も多かった。西南奥地の「出稼ぎ省」貴州・四川も一定数見られた。

Q3については、3人家族が12人、4人家族が17人、5人家族が13人、6人家族が9人、7人家族が1人であり、4人家族が最も多かった。

これに関連し、Q8では子どもの数を数・年齢・就学状況を尋ねている。まず、子どもの人数については、一人っ子が22人、二人が24人、三人が7人であった。計画生育(一人っ子政策)が農村部では必ずしも順守されていない現実が確認できた。子どもの平均年齢は9.3歳であった。就学状況については、留守児童の数を学校別にみると、未就学が8人、幼稚園が25人、小学校が34人、中学校が10人、高校が5人、社会人(アルバイト・出稼ぎ、無職等も含む)が8人であった。小学生の留守児童を持つ親が多いことが確認できた。

前後するが、Q5では出稼ぎ労働者の学歴について聞いている。内訳は、学歴なし1人、小学中退が7人、小学卒が10人、初中(初級中学=中学校)中退が2人、初中卒が27人、高中(高級中学=高等学校)中退が1人、中専(中等専門学校)卒1人、高中高校卒が4人であった。先行研究も明らかにしていたように、出稼ぎ労働者層には中学校レベル卒業者が最も多いことが確認できるほか、農村部のこの世代には、現在では九年制義務教育として整備されている課程を修了していない人も少なからずいる現実を理解できる。

Q6の月収については、現在の仕事またはこれまで就いていた仕事の収入を尋ねた。出稼ぎという不安定な雇用形態ゆえ、「〇〜〇元くらい」と幅のある回答が多かった。その場合は中央値をとって計算した。平均収入額は1,780円(23,140円)であった。出稼ぎが初めてで、現在求職中のため収入ゼロの人もいた。

収入に関連しQ7では実家への仕送り額を聞いた。一か月当たりの平均仕送り額は888円であった。

Q9は子どもが留守児童であるか否かを問うもので重要な意味を持つ。53人の回答者のうち、義烏に子どもを連れてきている出稼ぎ労働者は15人(28.3%)、子どもを実家に残している人は38人(71.7%)であった。出稼ぎ労働者の子女のための学校等が比較的

整備されているといわれる義烏市であっても、子どもを連れてきていない(=留守児童がいる)人が多い。

以下は留守児童をもつ出稼ぎ労働者を中心にみていこう。Q10-1については帰省する頻度を聞くものである。最も多かった回答が「1年に1回」で18人、次いで「半年に1回」で8人、以下、「3か月に1回」6人、「2年に1回」4人、「3年に1回」1人であり、驚いたことに「10年に1回」という人も1人いた。

Q10-2は留守児童の面倒を誰が見ているか複数回答可で聞くものである。「(父方の)祖父及び祖母」を挙げるものが最も多く19人、「(父方の)祖母」を単独で挙げたのが7人、「(母方の)祖母」を単独で挙げたのが4人、「(父方の)おば」を挙げたのが3人、「母」が3人、「(父方の)祖父」を単独で挙げたのが1人、「自力更生」と回答したのも1人いた。ここから、出稼ぎ労働者の多くが留守児童の世話を「おばあちゃん」に頼っていることが確認できる。また、この結果からは両親とも子どもの傍らにいないこともうかがわれるのである。

Q10-3は留守児童の情緒について尋ねるものであるが、あくまで保護者の主観である。「とても安定している」は7人、「どちらかと言えば安定」は17人、「普通」は5人、「どちらかと言えば不安定」は5人、「不安定」は4人であった。「不安定」と答えたある父親は「両親が不在でどうして情緒が安定するだろう」と述べた。

Q10-4は子どもの成績について尋ねるものであるが、小学校以上の子どもを持つ親に限定して回答を求めた。「とても良い」は1人、「どちらかと言えば良い」は9人、「普通」は13人、「どちらかと言えば悪い」は0人、「悪い」は4人、「分からない」は1人であった。

Q10-5は学校における人間関係(主に友人関係)を尋ねるものである。「とても良い」が9人、「どちらかと言えば良い」が16人、「普通」が1人、「どちらかと言えば悪い」「とても悪い」は共に0人、「分からない」が7人であった。概ね良好であるが、離れて暮らしているため幼稚園や学校における状況が分からないケースがあるようだ。

Q10-6は幼稚園や学校の留守児童に対する特別な支援や配慮の有無を聞くものである。「行っている」は7人、「行っていない」は24人、「分からない」は3人であった。行っている内容を尋ねたところ、学費の免除や心理相談等が挙げられた。Q10-7もほぼ同様の結果である。

Q10-8は地元政府の留守児童に対する支援の有無を聞くものである。「している」は6人、「していない」は22人、「分からない」は6人であった。支援の内容としては、貧困

学生への補助、学費減免、成績上位者への学費免除等があった。

Q11からは回答者(=子どもを持つ労働者)全員に対する質問である。子どもにどの程度の学歴を望むかとの問いに対し、「中学校卒業」が3人(5.7%)、「高校卒」が12人(22.6%)、「大学卒」が26人(49.1%)、「修士修了」が0人(0%)、「博士修了」が11人(20.8%)、無回答が1名(1.9%)であった。出稼ぎ労働者自身の平均的な学歴が中学卒であったことを考えると、子どもには自分より高い学歴を望んでいることが見て取れる。大学への進学を期待している親が多いほか、博士となってほしいという親も相当数見られ、期待の大きさがうかがわれる。学歴が低いために苦勞している自分にはなあってほしくないという筆者に話す労働者もいたことが忘れられない。

Q12は教育上の悩みや子どもへの期待を自由に述べてもらう項目である。ここでは留守児童の教育に関する悩みについて若干数紹介する。

- ・子どもがやんちゃで、言うことを聞かないこと。
- ・一緒に生活できない、子どもを連れてこられず世話ができない。悪いことを覚えるのではないかと心配。
- ・教育環境、家庭環境が心配。
- ・幼稚園でしっかり食べさせてもらっているか、しっかり面倒見てもらっているか心配。
- ・義烏では入学が難しいこと。
- ・一般学校は出稼ぎ労働者の子どもを受け入れない。かといって私立学校の学費は高すぎる。
- ・学費が高いこと。教育費が足りないこと(毎学期400~500元が必要)。学校の雑費の請求が多すぎること。
- ・農村の教育水準が低い、学校教育の程度が低いこと。
- ・祖父母の教育方法が適切でない、甘やかしすぎる。
- ・まじめに勉強しないのが心配。
- ・子どもが勉強できない。飲み込みが悪い。授業についていけない。
- ・インターネットに嵌っていること
- ・無駄使いすること。忍耐と勤勉さが足りないこと
- ・子どもの安全、セキュリティの問題。
- ・学校や社会の風紀が悪い。
- ・学校が農村教育を重視していない点。
- ・先生の質が悪く、体罰があること。管理が行き届かないこと。教育理念が違うこと。

教育上の悩みを語る親たちの口ぶりからは、一様に自分が子どもに寄り添うことができ

ない不安感、面倒を見たり、勉強するよう督促・激励したりすることのできない焦燥感が伝わってくる。子どもの面倒をみてくれる祖父母に感謝しつつも、その生活指導や教育方針には懐疑的な親が多い。都市と比較した農村教育の水準を嘆く親も多い。出来るなら子どもを連れてきてこの地で通学できないかとも考えている。しかし大部分の人が現在の境遇に甘んじるしかない現実がある。そして今日もまた新たな留守児童が生まれるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 中国農村における留守児童の夢と社会的支援に関する一考察——フィールドワーク2年目の総括

2012年3月25日,九州保健福祉大学研究紀要第12号,pp.57-68.

- ② 中国の留守児童と出稼ぎ労働者——フィールドワーク1年目の総括

2011年3月25日,九州保健福祉大学研究紀要第12号,pp.57-68.

- ③ 中国における未成年者保護の現実と可能性——児童誘拐及び売買の事例を通じて

九州保健福祉大学研究紀要第11号,2010年3月25日,pp.53-63.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

登坂 学 (TOSAKA MANABU)

九州保健福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号: 50308144